は以下の書題が記載されている。

一　花沢　鼎・岩沢　力：歯槽膿漏ノ病理及療法ノ梗概
二　花沢　鼎：根管ノ解剖、清掃、消毒
三　花沢　鼎：根管充填
四　花沢　鼎・杉山不二：歯牙再植術
五　花沢　鼎：歯髄切断法
六　花沢　鼎・安田康輔：「ラバーダム」防湿法
七　花沢　鼎：歯髄炎ノ症候診断及療法
八　遠藤至六郎：口腔外科臨床講義集

第一篇は大正十四年七月十五日、二・三編は八月一日発行された。第四編は原稿の最初の頁のみが、本学に保存されているが、他の書誌学的事項は不明である。

第五編は発行された事実は広告によりわかるが、他は不明である。

第六・七編は恐らく発行されなかったと推定される。

一方、第八編は歯科学報に遠藤が長期間連載し、昭和十年、本叢書とは別に単行本として出版された。

以上の概要と一～三編の書誌学的詳細を報告する。

（東京歯科大学）

29　明治大正期歯科保存学書の比較書誌学的研究

森山　徳長・○長谷川正康

わが国に西洋歯科医学が導入され、洋方歯科医学書が出版されはじめたのは明治十二年のことであり、一般大衆向きの啓蒙書であった。明治十四年六月、第三番目に高山紀斎著『保歯新論』が刊行された。本書は当時の米国における Operative Dentistry の形式にならって書き下ろされた日本最初の歯科保存学書である。この第一の保存学書は解剖・胎生・組織学や矯正歯科学も含んだ歯科保存学を主体として、歯科一般を記述した書物である。別に高山歯科医学院義録では歯科病理学で歯髄処置などを取り扱っている。

第二は、講義録以後発表した高山歯科医学院編・高山紀斎著の教科書『歯科手術論』と『歯科汎論』（共に明治二十

五年）にその成長した形を見ることができる。
この時点（明治二十五年）では、保存学一般の概略と抜歯等の外科処置は歯科汎論で扱われ、歯科手術論は、金箔充塡を主体とした歯科充塡学の体装で記述せられている。
第三は、東京歯科医学院講義録の血脇守之助著『歯科治術学』（明治三十三）である。
ここで血脇は「治療学と手術学を合わせたもの」すなわち「歯牙歯及歯牙に近接する顎骨の疾病を治療し（therapeutics）あるいは人工を以て歯牙の欠損部を補綴するの術（operatives）を講究する学科」としている。
第四には血脇が招いた米国帰りの佐藤運雄の『歯科充塡学』（明治三十八）『歯科学通論』（明治四十）があり、充塡・治療一般を扱っている。
この頃になってBlackに代表される米国流の抜歯等も含むOperative Dentistryから歯科保存学の独立が見られたといえよう。
第五に、明治四十～四十四年の『新纂歯学講義』では、佐藤『歯科治療学』、奥村『歯科充塡学』となり、この傾向が固定される方向に進む。

大正世代に入ると、この風潮がさらに明瞭になる。
第六には『歯科学講義』（大一～六）では川上為次郎『歯科治療学』、奥村『歯科充塡学』となり、この講義録歯科全書の後を受け、大きく様変わりする。
第七は、各教授書下しの単行本教科書『歯科学叢書』として発行された、第一編花沢鼎纂著『保存歯科学』（大正五）で、W. D. Millerの著書の充塡学部分を除いた訳業である。
わが国で保存歯科学という学科目が定着する端緒となった。
第八は同叢書第二編榎本美彦著『鑲嵌法』（大六）で当時最新のポーセレン及びメタルインレー法の紹介である。
大正末期十四年になって、主として花沢鼎により臨床歯科学叢書として、第九番目に『歯槽膿漏の病理と療法の梗概』、十～十二番目に『根管の解剖・清掃・消毒』『根管充塡』『歯牙再植術』等が順次出版され、治療・充塡・歯周・歯内各部分の祖型が大凡でき上り、次の昭和期を迎えることになる。
以上の発達史を具体例の著作を挙げて報告する。

（東京歯科大学）